

花のき村と盗人たち

新美南吉

むかし、花のき村に、五人組の盗人^{ぬすびと}がやって来ました。

それは、若竹が、あちこちの空に、かぼそく、ういういしい緑色の芽^めをのばしている初夏のひるで、松林では松蟬^{まつせみ}が、ジイジイジイ^な鳴いていました。

盗人^{ぬすびと}たちは、北から川に沿ってやって来ました。花のき村の入り口のあたりは、すかんぼやうまごやしの生^はえた緑の野原で、子供や牛が遊んでおりました。これだけを見ても、この村が平和な村であることが、盗人^{ぬすびと}たちにはわかりました。そして、こんな村には、お金やいい着物を持った家があるに違いないと、もう喜んだのでありました。

川は藪^{やぶ}の下を流れ、そこにかかっている一つの水車をゴトンゴトンとまわして、村の奥深くは行っていきました。

藪のところまで来ると、盗人のうちのかしらが、いいました。

「それでは、わしはこの藪のかげで待っているから、おまえらは、村のなかへは行っていい様子を見て来い。なにぶん、おまえらは盗人になったばかりだから、へまをしないように気をつけるんだぞ。金のありそうな家を見たら、その家のどの窓がやぶれそうか、その家に犬がいるかどうか、よっくしらべるのだぞ。いいか釜右エ門^{かまゑもん}。」

「へえ。」

と釜右エ門が答えました。これは昨日まで旅あるきの釜師で、釜や茶釜をつくっていたのでありました。

「いいか、海老之丞^{えびのじょう}。」

「へえ。」

と海老之丞が答えました。これは昨日まで錠前^{じょうまえ}屋で、家々の倉や長持^{ながもち}などの錠^{じょう}をつくっていたのでありました。

「いいか、角兵エ^{かくべえ}。」

「へえ。」

とまだ少年の角兵エが答えました。これは越後から来た角兵エ獅子^{かくべえじし}で、昨日までは、家々の鬨^{いぎ}の外で、逆立ちしたり、とんぼがえりをうったりして、一文二文の銭^{もん}を貰^{もら}っていたのでありました。

「いいか、鮑太郎^{かんなたろう}。」

「へえ。」

と鮑太郎が答えました。これは、江戸から来た大工の息子で、昨日までは諸国のお寺や神社

の門などのつくりを見て廻り、大工の修業していたのでありました。

「さあ、みんな、いけ。わしは親方だから、ここで一服すいながらまっている。」

そこで盗人の弟子たちが、釜右エ門は釜師のふりをし、海老之丞は錠前屋のふりをし、角兵エは獅子まいのように笛をヒャラヒャラ鳴らし、鉦太郎は大工のふりをして、花のき村にはいりこんでいきました。

かしらは弟子どもがいてしまうと、どっかと川ばたの草の上に腰をおろし、弟子どもに話したとおり、たばこをスツパ、スツパとすいながら、盗人のような顔つきをしていました。これは、ずっとまえから火つけや盗人をして来たほんとうの盗人でありました。

「わしも昨日までは、ひとりぼっちの盗人であったが、今日は、はじめて盗人の親方というものになってしまった。だが、親方になって見ると、これはなかなかいいもんだわい。仕事は弟子どもがして来てくれるから、こうして寝ころんで待っておればいいわけである。」とかしらは、することがないので、そんなつまらないひとりごとをいってみたりしていました。

やがて弟子の釜右エ門が戻って来ました。

「おかしら、おかしら。」

かしらは、ぴょこんとあざみの花のそばから体を起こしました。

「えいくそッ、びっくりした。おかしらなどと呼ぶんじゃねえ、魚の頭のように聞こえるじゃねえか。ただかしらといえ。」

盗人になりたての弟子は、

「まことに相すみません。」

とあやまりました。

「どうだ、村の中の様子は。」

とかしらがききました。

「へえ、すばらしいですよ、かしら。ありました、ありました。」

「何が。」

「大きい家がありましてね、その飯炊き釜は、まず三斗ぐらいいは炊ける大釜でした。あれはえらい銭になります。それから、お寺に吊ってあった鐘も、なかなか大きなもので、あれをつぶせば、まず茶釜が五十はできます。なあに、あっしの眼に狂いはありません。嘘だと思ふなら、あっしが造って見せましょう。」

「馬鹿馬鹿しいことに威張るのはやめろ。」

とかしらは弟子を叱りつけました。